



吉村作治先生

[エジプト考古学者]

日本におけるエジプト考古学の第一人者で、数々の遺跡を発見し、世界的にも高い評価を受けている吉村作治先生。今回は、調査活動などでお忙しいスケジュールの合間をぬって、インタビューに答えていただきました。

小学校の図書館で 「運命の一冊」に出会った

小学生時代の私は、運動が不得意。放課後は友達と外で遊ぶより、図書館で本を読む方が好きな少年でした。

図書館では、それこそ様々な本を読みました。中でも熱心に読んだのが「伝記」です。そこには、司書の女性の先生の「人生は1回限り。だけれども、伝記を読むと、成功したたくさんの人の人生がかいま見える。その中で、いちばん面白そうだと思う人の人生をやってみるのもいい」という教えがありました。

そんなある日、私は、イギリス人考古学者、ハワード・カーターの王墓発掘記『ツタンカーメン王のひみつ』に出会いました。そして、「この人のような生き方ができたらいいな」、「考古学者になりたいな」という思いを持ったのです。

それからの私は、考古学者になるために、それまでとは違って、熱心に勉強を始めました。いわば、その本との出会いが、私の人生を決めたと言ってもいいでしょう。

図書館の良さは、人との会話が禁止されているために、誰にも邪魔されずに自分だけの世界をつくれるところにあります。先日、創立50周年の行事で母校の小学校を訪れたとき、図書館を見て、その小ささに改めて驚きました。それでも、子ども時代の私にとっては、すごく大きくて、豊かな空間だったのです。

努力すること、諦めないことの 大切さを教えてほしい

今の子どもたちを見ていると、いちばんの問題は「我慢ができない」ことにあると感じます。若い人の中にも「どこかに自分にぴったりの仕事、天職があるはずだ」と思い込んで、次々と仕事を変える人がいます。

しかし私は、それは間違いだと思います。ごく一部の例外を除いて、人には、最初から何かの仕事に向いていると言えるような、特別な才能はないものなのです。

では、どうすればよいのでしょうか？
努力すればよいのです。

私は、自分自身、努力することだったら誰にも負けないと思っています。実際、考古学の分野で一流になるためには、相当な努力と実績、時間が必要です。考古学とは、20年続けてみて、やっと何かが見えるか見えないかという学問なのです。

私が初めてエジプトに発掘調査に行ったのは1966年。それから43年、そのキャリアの上に今の私があります。ここまで続けてこられたのは、「やめたら終わりだ」という信念があったからです。

人生、歩いて行ける道は一本しかないのです。途中で諦めてしまったら、それまでの歩みがムダになってしまいます。

一方、「これでは食べていけないから」と、なりたい職業や、やりたいことがありながら、収入だけを見て諦め

てしまう人もいます。

しかし、たとえ収入がたくさんあっても、やりたくもないことをやるのは、実はとても不幸なことなのです。逆に、少しくらいお金に困っても、自分がやりたいことをやって生きている人のほうが、人生においては成功者なのです。

小学生時代の司書の先生は「やりたいと思うものをやってみればいいよ」と、小さな私の背中を押してくれました。今の先生方にも、子どもたちに、努力すること、諦めないことの大切さ、本当の意味での人生の成功について教えてほしいと思います。

教えることは「難しいこと」。 その「覚悟」が必要

私も「教える」ということで言えば、小学校の先生方と同じ立場です。しかし、小学生を教えるには、そのための特別な技術を身につけていなくてはならない。その意味で、高校、大学で教えるよりも、数倍の能力が必要です。

私もできれば、これから先の未来がある、小学生の子どもたちに教えたい。しかし、率直に言って、それができる力は、私にはありません。

小学生を相手にものを教えるということは、それだけ難しいことなんです。

難しくって当たり前なんですよ。

それを「当然だ」と思わずに「大変だ」と思うからしんどくなってしまう。やるからには「大変なのだ」という覚悟を持って臨まなくちゃ。その心構えこそ、今の先生たちに、もっとも必要なものではないでしょうか。

PROFILE

よしむら・さくじ●1943年東京都生まれ。サイバー大学学長。早稲田大学客員教授。工学博士（早大）。エジプト考古学者。66年、アジア初の早大エジプト調査隊を組織し現地に赴いて以来、40年以上にわたり発掘調査を継続、数々の発見により国際的評価を得る。公式HP <http://www.egypt.co.jp> サイバー大学HP <http://www.cyber-u.ac.jp>

**教えることは、難しくって当たり前。
だからこそ、大きな覚悟が必要です。**